

特集「学問と社会の接点」について

中 田 行 重

東亜大学 総合人間・文化学部 紀要編集委員長

E-mail: nakata@po.cc.toua-u.ac.jp

今回の特集のテーマは「学問と社会の接点」である。実はこれは、教員が書き易いテーマとして選ばれた。本学部は「総合」の名が示す通り、幅広い研究分野の人間が集まっている。人間学、人間動態論、文明史学、比較文化学、健康科学、臨床心理学、スポーツ学、情報・自然科学、と8つの教室・研究室からなり、そのそれぞれの教室・研究室のなかで更に様々な研究分野の広がりがある。このように多様な研究者たちが一つのことについて書こうとすると、包括度の高いテーマにならざるを得ない。

その包括度の高いテーマにも様々なものがあり得る。本学部と比較的近いテーマをざっと考えただけでも「人間」「いのち」「生」「性」「知」「文化」「生命」「生活」「科学」「社会」「技術」など、幾つもの概念が浮かび上がってくる。これらの概念をどう扱い、どのように色付けするかによって、更に様々なテーマが誕生し得る。極めて抽象度の高いテーマにもなり得るし、その反対の、具体的で実際的なテーマにもなり得る。

こうしてみると、本学部が多様な分野の研究者の集まっていながら、「総合」という名を冠して一つのまとまった学部として教育と研究を進めようとするのは、抽象性と具体性の中で常に葛藤することを余儀なくされることを示唆しているように思われる。精神分析のフロイトは葛藤の完成を人間の健全な精神状態と考えた一方で、葛藤の完全な完成はないと考えていた。そして、葛藤の完全な完成もないということをも葛藤図式のなかに組み込むことが更なる

完成度の近い葛藤であることをも知っていた。このことは、何も個人の精神内界のことだけではないであろう。本学部においても、抽象性と具体性の中で、より創造的で成熟した葛藤を抱え続けたいものである。

もともと、「人間」なり、「社会」なりという全体的なものがある、それを分析していこうとして、個々の学問分野へと細かく専門化したのである。「学問と社会の接点」というテーマが大きな抵抗もなく多様な研究分野の人間に選ばれたということは、多くの研究者の中に「学問と社会の接点のなさ」と、全体的なものへの回帰の必要性が感知されているからであろう。細分化したそれぞれの研究分野で専門化することは「社会との接点」を失わせる方向性を含んでいるとも言えよう。その「接点のなさ」を常に生き生きと意識し続けることが、創造的で成熟した葛藤への要件の一つであろう。

既に社会にはその流れがあるように思われる。環境や食品の安全性への関心の高まりなどは、企業や個人、あるいは国の利益よりは地球規模での人類の利益を、という全体性への回帰の動きの現れの一つであろう。

ここに「社会には」と書いたが、そのこと自体、大学と社会が分離していることを示している。そのことはある程度仕方がない。しかし、そのことを常に葛藤し続け、社会の一部としての大学として本学部では何が出来るのかを考えていくことが、既に社会に起こっている全体性への回帰の流れと歩調をともにする大学として生きて、いや、再生していくことを促すのでは

ないか。

本特集がそのような流れを促す刺激となることを望んでいる。